

---

# 社会的マイノリティへの関心を与える個人内の要因の検討

バリアフリー教育開発研究センター  
2017年度リサーチアシスタント  
天野 快

---

## 1. はじめに

近年、全世界でグローバル化が進行するに伴い、文化的背景を異にする多様な人々の共生は社会的課題となっている。日本では2014年の障害者権利条約の批准に合わせ、2013年に障害者差別解消法が成立、障害者雇用促進法が改正され、2016年に施行されるなど（川島・飯野・西倉・星加, 2016）、社会的マイノリティの人権を保障するための制度の整備が進められている。

一方、これまでの社会ではなじみのない価値観が流入する「多文化主義（multiculturalism）」の到来に伴い、マイノリティの権利の主張を多数派の権利の侵害だとして反発するという「現代的レイシズム(modern racism)・象徴的政治行動(symbolic policies)」と呼ばれる新しい形での偏見・差別が表出しつつあるという指摘もなされている（北村・唐沢, 2018）。このような差別は社会から社会的マイノリティを引き離す一方、古典的な差別とは異なり社会からは見えにくい差別とされており、より深刻な問題となっている。

また教育現場においても社会的マイノリティがその存在を十分に認知されないがために生きづらさを抱えているとする見方もあり（稲葉, 2012, 若槻, 2015）、子どもの権利の保護の観点からも、多様な価値観が共存する社会における人格形成という観点からも学校教育現場において社会的マイノリティとの共生に向けた取り組みが必要である。

以上のように社会的マイノリティへの理解の深化が求められ、一方で偏見・差別の在り方が従来と異なってきているという指摘がされているが、現代における社会的マイノリティへの印象・態度に関する研究は特に日本においてはほとんど行われていない。またその言葉自体にはネガティブな意味はなくても一定のバイアスを与え、社会的マイノリティに属する人たちに不利益を与える形での差別も存在する。

本研究では現代日本における社会的マイノリティへの態度・印象およびそれらを形成する要因について検討する。

## ステレオタイプ・偏見・差別

社会心理学において集団間の関係性を説明するものとして、ステレオタイプ・偏見・態度がよく用いられてきた。ステレオタイプは集団成員の属性に関する一般化された固定観念を指す。ステレオタイプに感情的要素が加わったものを偏見といい、ステレオタイプや偏見が観察可能な行動に結びついたものが差別と定義される。

偏見に付帯する感情にはネガティブなものだけではなくポジティブなものも含まれる。(池田・唐沢・工藤・村本, 2010)。

## 偏見・差別が人々に及ぼす影響

ここではまずステレオタイプ・偏見・差別の関係性について整理する。ステレオタイプとは、ある社会的集団やそのメンバーに対して、個人が抱くことの多い定型的な信念・期待などの認知（他者の属性と性質・特徴の結びつきの捉え方）であり、偏見はある特定の集団やその成員に対するステレオタイプに基づいた感情・評価を含む態度であり、差別は偏見に基づいた行動のことを指す。近年ではポジティブな偏見であっても当事者にとってネガティブな影響が出ているとされている。

偏見や差別は人権の侵害であるとともに、当事者の生活、生命に悪影響を及ぼすことが多くの先行研究で示されている(Hunger, Mayor, Blodorn, Miller, 2015, 北村・唐沢, 2018)。凶悪な犯罪に巻き込まれる可能性が高まる(Devine, et al., 2014, 北村・唐沢, 2018)だけではなく、偏見のある者との間で発生した気まずさや不自然さを受け、不安や緊張などの心理的負担が生じ、結果として精神的・身体的健康を損ねる結果につながるとする研究が蓄積されている(Fisher, et al., 2000, 北村・唐沢, 2018)。

特に、Fischerら(2000)の研究のよると青年期に受けた人種差別は制度的・教育的差別のみならず自尊心にも負の影響を与えることが示されており、児童・生徒の心身教育現場での偏見・差別に対する取り組みの必要性が伺われる。

## 偏見・差別の要因

北村・唐沢(2018)は偏見・差別はカテゴリー化、ステレオタイプの形成、集団間バイアスなどの社会心理学的要因が背景にあるとしている。カテゴリー化やそれに伴うステレオタイプの形成は人が他者の情報を獲得すること

を容易にする情報処理であり，日常生活における判断を迅速にする半面，カテゴリーに従い他者を不当に判断してしまうリスクも伴う。また集団間バイアスは内集団と外集団の区別により生じ，最小条件集団の実験(Tajfel, et al., 1971)のように集団を区別する条件がほとんど意味を持たず，また自集団に属することがメンバーに利益をもたらすものではない状況であっても，内集団を外集団よりも優遇するという傾向が見られた。集団間バイアスは本人の自覚なしに生じるものであるとされており，当人は平等主義的な立場を守ろうとしていたとしても内集団のメンバーに対しより肯定的な感情を抱き，優遇する傾向がみられる。

また政治的イデオロギーとの関連も示唆されている。政治的イデオロギーは「どのような社会的秩序が適切で，それがどのように確立されるべきかに関する信念体型」であると定義されており(北村・唐沢，2018)，研究が主に行われているアメリカ含め多くの国では，保守・リベラルに大別される。Jostら(2009)によると保守とリベラルは「社会的な変化に抗うか受け入れるか」と「社会的不平等を受け入れるか否定するか」にある(Jost, et al., 2003bc)。保守主義は伝統的な価値の喪失，弱者の権利の主張に対し脅威を感じる「右翼権威主義(right-wing authoritarianism: RWA)」や集団間の優劣の差や上位集団による抑圧は安定した社会秩序のために必要であるとみなす「社会的支配傾向(social dominance)」と親和性が高いとする研究結果は数多くある(北村・唐沢，2018)。しかし「保守主義者は差別をする」というステレオタイプを持つのではなくその背景にある心理過程を考察する必要がある。

Jostらは「認識的」，「実存的」，「関係的」という三種類の動機づけが保守イデオロギーの基礎になるという「動機づけられた推論過程(motivated reasoning)」について論じている(Jost, et al., 2003)。その中でも実存的動機は自己・所属集団の生命や安全を脅かす事態への対処に関わる動機であり，保守主義者の方が望ましくないネガティブな出来事に対して敏感である。その背景にはイデオロギー間の道徳的価値観の違いがあると考えられる。

Haidt (2012)などによると政治的イデオロギーの根底には道徳的基盤があり，保守派はリベラル派よりも集団への忠誠[Loyalty]や集団の秩序の維持[Authority]，個人・集団の神聖性[Purity]を重視する。特に神聖性の背景にある死への意識や不純なものが感染・蔓延することへの脅威が嫌悪感に結び付き，集団の秩序やそれを維持するための権威の重視と共に少数者の排除や偏見を助長するという傾向が見られるとしている(Haidt, 2012, Graham, 2009)。

日本において政治的イデオロギーを調査した研究は少ないが友枝(2016)によると高校生を対象にした意識調査において保守傾向が進んでいることが報告されている,この背景にはグローバル化により国際関係の緊張が浮き彫りになったことが挙げられている。

日本では政治的イデオロギーの在り方が欧米諸国と異なることが報告されているが(曹, 2018),「どのような社会的秩序が適切で,それがどのように確立されるべきかに関する信念体型」が政治的イデオロギーとされている以上,社会的秩序と密接な関係のある差別・偏見との関連はこれからの研究が望まれる。

### 偏見・差別を低減させる要因

「相手との接触」は教育現場などの実践場面において有効性と有用性が高いと考えられているが(北村・唐澤, 2018),地位の対等性,共同,社会的・制度的支持,親密な接触などの諸条件を備えた接触でないと,不安や緊張が過度に生じかえって偏見や敵意を助長する結果となってしまう(加賀・横田・坪井・工藤, 2012)。また拡張接触や仮想接触は直接接触で生じうる負の感情が生じず,偏見の低減に有効であるとされている。このことからどのような接触の仕方が偏見・差別の低減に有効なのかに関する研究が急がれる。

### 現代における偏見・差別

象徴的政治行動(Symbolic Politics)は人種差別の変遷の中で提唱された。McConahay (1986)はアメリカにおける黒人に対するレイシズムの 20 世紀半ばにおける変容を題材に,古典的レイシズム(Old-Fashioned Racism)から現代的レイシズム(Modern Racism)への移行について言及した(高・雨宮, 2013)。古典的レイシズムは,人種や民族,宗教などを理由に,就職や結婚などにおいて差別的対偶を行うことを指し,人権運動の影響,その後の教育改革により人種間の平等が訴えられ,あからさまに表明される機会は減少した。しかし偏見・差別は消えたわけではなく古典的レイシズムよりは微妙ではあるが差別行動に結び付くものとして現代的レイシズムが挙げられる。

McConahay によると黒人に対する現代的レイシズムの持ち主は往々にして人間観の平等の必要性自体は認めているが,(1)偏見・差別は既に存在しておらず,(2)現に存在する経済的格差は不平等によるものではなく黒人の努力によるものであり,(3)黒人は政府による優遇を過剰に求め,(4)不当な経済的恩恵を受けている,と考えているとされている(高・雨宮, 2013)。高・

雨宮(2013)はこの現代的レイシズムはそれを抱いている本人にとって自覚しにくいものであるが、古典的レイシズムと同様差別行動につながるという研究を示している。

また高・雨宮(2013)は日本における在日コリアンに対する偏見には、現代的レイシズムの方が古典的レイシズムよりも平均値が高く、現代的レイシズムの方が古典的レイシズムよりも受容・表出が容易であること、また現代的レイシズムも日本において差別的な行動に確かに結びつくことを示している。

## 2. 本研究の目的

以上のように偏見・差別の在り方が変容する中で、現代の日本において社会的マイノリティに対する関心とその要因、及び社会的マイノリティへの態度・印象について検討する。本研究では社会的マイノリティの中でも教育現場でとりあげられることが多い発達障害、身体障害、性的マイノリティ、貧困について取り上げる。

### 発達障害

発達障害という概念は近年よく用いられているが、その実態はあいまいなまま用いられている(日本心理臨床学会, 2011)。日本では福祉的・行政的な用語である”Developmental Disabilities”と医学的な用語である”Development Disorders”を含む用語として「発達障害」が用いられている。

心理臨床学辞典(2011)によると、今日の一般的な理解としては①子供の発達途上で出現する障害であり、②その障害が生涯にわたってなんらかの形で持続し、③発達の特定の領域で、社会的な適応上の問題を引き起こす可能性がある、④背景に脳の機能の障害が想定されるという4点があげられる。また発達障害を持つ人への援助に対する問題点として、①本来様々な特徴・あり方がある発達障害を類型的・画一的にとらえる傾向、②発達障害における関係性や発達の重要性の理解の不足、③発達障害の一部の特徴にのみ着目され個々人のありよう全体を見るという視点が欠如されていると指摘されている。

生川, 梅谷, 前川(2006)は知的障害者に対する態度に関する文献研究を行い性差、接触の発達障害への影響について検討し、男性よりも女性の方が、接触経験がある人の方がいない人よりも好意的な態度を示すことを示唆した。

## 身体障害

豊村・佐藤(2008)は身体障害者に対する態度に関する要因を、身体障害者との個人としての係わりに関する個人的関与因子、身体障害者の共生への共感および矯正と結びつく能力に結び付く共生志向因子、身体障害者に対して社会的にかかわるといふ社会的関与因子に分類した。それぞれの因子と発達変化、性差、交流経験・知識との関連を考察し、成長の過程により各因子とのかかわり方が変化し(中学生・高校生が障害者に対する好意的な態度が低く、小学生・大学生は好意的な態度が高い)、その背景には仲間意識の強さがあると考えられている。またほぼすべての要因において男性よりも女性の方が好意的な態度を示し、また交流経験、知識との関連性は統計的には有意ではあるものの認められなかった。この研究では交流経験や知識の質について検討する必要があると考察されており、河内(2006)でも接触する障害者が「友人」である場合とそうではない「一般対象」群である場合を比較し、対等な関係を結びうる前者が一方的援助になりやすい後者よりも親密さや障害者に関わる活動への参加が高い傾向が示されている。この研究からも接触の回数だけではなくその質が身体障害者への態度に影響していると考えられる。

## 性的マイノリティ

2010年代に入り性的マイノリティは「LGBT」というくくりでとりあげられ、経団連や政府による調査<sup>1</sup>も行われており、またメディアでも娯楽の消費対象としてだけでなく日常生活の一部として報道、教養番組で扱われるケースが増えてきており性的マイノリティの存在を日常生活の一部として取り込む動きが多く見られた(釜野, 2017)。

しかし性的マイノリティの存在・権利が意識される中、権利の拡大や主張に対する非融和的な議論や、言論の自由を盾に性的マイノリティへの嫌悪感を肯定するような風潮も現実問題として生じている。

釜野ら(2016)では性的マイノリティに対する嫌悪感と身近に性的マイノ

---

<sup>1</sup> 経団連による調査としては、経団連による企業の「LGBT」への取り組み実態調査(2017)が、政府による調査としては文部科学省による「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について」(2016)などが挙げられる。

リティがいるか否かの認識との関連を検討し、身近に性的マイノリティに該当する人がいないと認識している人の方が、いると認識している人よりも嫌悪感が高いという結果が出た。また 20—30 代といった若年層よりも 60—70 代の方が嫌悪感を示す割合が高く年代と性的マイノリティへの態度との関連も示唆されている。

また友人からのカミングアウトに関して男性よりも女性の方が好意的にとらえる傾向が高く、また両性において年代の上昇に伴い否定的感情を持つ傾向が見られた。

本論文では釜野ら(2016)にならい一般に用いられる LGBT よりもより広い領域を指す言葉として性的マイノリティという単語を用いている。

## 貧困

貧困に対する態度は主に社会心理学における社会的動機づけの分野で研究されてきた(Weiner, 2012)。

社会的動機づけは日常生活における他者との関わりの中で生じる行動のことを指す。Weiner(2012)は社会的行動を引き起こすきっかけとなる出来事の原因の帰属次元を三次元であるとまとめている。

まず一つ目の次元は原因の所在であり、これは出来事が生じた原因が当人にあるかどうかということに関する次元である。例えば内申点が低い場合、教師に偏見がある場合は原因が外在しているといえるが、遅刻の回数が多い場合は原因が内在化しているといえる。

二つ目の次元として原因の統制可能性、あるいは原因が意志によって変わりうる程度が挙げられる。同じ内的な原因においても失敗の原因が適性の不一致や能力の不足であった場合は意志の力ではどうしようもなく、統制可能性が低いと考えられ、原因が努力不足であった場合は意志の力が強ければ対処することができたと考えられるため統制可能性が高いと考えられる。

三つ目の次元は原因の安定性である。例えば数学の失敗の要因として、知能の性質は時間を超えて安定しているが不運による失敗は一時的なものであると考えられる。

Weiner(2012)は特に統制の可能性に着目し、出来事の要因が統制可能性の低いものであれば非難する傾向が低く統制可能性が高いものであれば非難が高くなる傾向があるとしている。

個人差の要因としては、上記の帰属理論の概念との関連が示唆される政治的イデオロギーがあるとされており、保守派よりもリベラル派の方が貧困の

要因を非援助者が統制不可能な原因に帰属するため援助をする傾向があるとしている。また性差についても多くの研究()で男性よりも女性の方が積極的に援助をすると概観している。

以上の先行研究から社会的マイノリティへの態度は個人の特性や価値観によってあり方が異なることが予測される。また各社会的マイノリティは社会における少数派という共通点はあるものの、上記の通り成り立ちの要因が異なるため態度の持たれ方が異なると考えられる。

本研究では社会的マイノリティへの関心に与える個人内の要因について各社会的マイノリティの先行研究において見られた性別、年代などの社会的カテゴリー及び、接触の在り方、政治的イデオロギーの背景にある道徳基盤などの観点から検討し、各要因が社会的マイノリティへの態度にどれだけ影響しているのか、また各社会的マイノリティへの影響の与え方の際について検討する。

### 3. 研究の方法

#### 参加者

(株)マクロミルのモニター520名(男性260人、女性260人、平均年齢44.96歳、レンジ：20-80歳、SD=14.87)。を対象に行った。

#### 調査内容

##### ・各社会的マイノリティへの関心

発達障害、身体障害、性的マイノリティ、貧困の各社会的マイノリティに対してどの程度関心があるかについて各1項目の質問を行った。実施時には6件法(1:まったく熱心でない～6:きわめて熱心である)での評定を求めた。

##### ・各社会的マイノリティへの接触

各社会的マイノリティに対する接触の度合いについて各社会的マイノリティに自身が属するの、家族に当事者がいるの、友人・知人居当事者がいるかという三通りの問い(以下ではそれぞれ「自身」、「家族」、「知人」)について各1項目の質問を行った。実施時には2件法(1:はい、2:いいえ)での評定を求め、倫理上の配慮から「3:答えたくない」の項目も用意した。3を回答した項目は欠損値として扱った。

また各社会的マイノリティへの専門性についても回答を求めた(以下では「専門」)。実施時には6件法(1:まったく熱心でない～6:きわめて熱心である)での評定を求めた。

#### ・ LOC (Locus of Control)

LOC (Locus of Control)は Rotter(1966)により人間が一般に自分自身の行動と強化の生起が随伴しており,強化の統制が可能であるという信念を持っているかどうか,行動を予測する上で重要な人格変数として定義された(鎌原, 樋口, 清水, 1982)。先行研究より社会的マイノリティに対する態度は出来事の責任を内的なものとするか外的なものとするかにより異なることが報告されており, その検証として本尺度を用いる。

#### ・ 道徳基盤理論

道徳的基盤尺度 (Graham, et al., 2009) の日本語版 (金井, 2013) に説明を加えたものを用いた。道徳基盤理論の概念を反映したものであり, 「ケア/危害」基盤 (例:誰かが精神的に傷ついたかどうか), 「公正/欺瞞」基盤 (例:一部の人が他とは違う扱いを受けていたかどうか), 「忠誠/背信」基盤 (例:行動が自分の国に対する愛に基づいていたかどうか), 「権威/転覆」基盤 (例:権威(力をもっているものや存在)に対する敬意(尊敬する態度)が欠落していたかどうか), 「神聖/墮落」基盤 (例:一般的な純潔さ(けがれがなく清らかなこと)や良識(物ごとの健全な考え方)の基準に反していたかどうか)の5つの基盤からなる。質問項目は各因子6項目ずつ含みダミー項目を1つ加えた計16項目の項目群2種類, 計32項目からなる。実施時には6件法(項目群1; 1:まったく関係がない～6:きわめて関係がある/項目群2; 1:まったく同意しない～6:非常に同意する)での評定を求めた。

そのほかに性的マイノリティに関する先行研究において強い説明力を持っていた年齢, 性別を独立変数として分析を行った。

## 結果

本研究の分析は, 特に断りがない限り, R3.3.1.を用いて行った。また欠損値に関しては, 特に説明のない限りリストワイズ法を利用して処理を行った。

① 社会的マイノリティへの関心に及ぼす要因(年齢・世代)

各社会的マイノリティへの関心と年齢，世代，接触のあり方（専門的に学んだか，当事者が自身であるか，家族であるか，知人であるか（以下それぞれ「専門」，「自身」，「家族」，「知人」と記す））との関連について相関分析・重回帰分析を行った。また発達障害，身体障害的マイノリティは子供の有無，貧困は個人年収，世帯年収（200万未満，200～400万未満，400～600万未満，600～800万未満，800～1000万未満，1000～1200万未満，1200～1500万未満，1500～2000万未満，2000万円以上，わからない）との関連についても検討した。

	発達障害 に対する関心		身体障害 に対する関心		性的マイノリティ に対する関心		貧困 に対する関心	
	$\beta$	r	$\beta$	r	$\beta$	r	$\beta$	r
性別	.34***	.19***	.32**	.15*	.31**	.14*	-.23	.16***
年齢	.00	0.02	.01*	0.11	-.00	-.13	.01*	.06
専門	.42***	.52***	.40***	.40***	.41***	.45***	.27***	.32***
自身	-.36	-.19***	-.90***	-.19***	-1.51***	-.17***	-.48*	-.20***
家族	-.69***	-.22***	-.36	-.10	-.80	-.01	-.48	-.21***
知人	-.46**	-0.32	.02	-.14*	-.44**	-.19***	-.41*	-.16***
子どもの有無	.49**	.19***	.35**	-	.11	-	-	-
個人収入	-	-	-	-	-	-	-.03	-.15*
世帯収入	-	-	-	-	-	-	-.07	-.15*
R <sup>2</sup>								

表 1：社会的マイノリティと性別，年齢，接触のあり方（「自身」，「家族」，「知人」），子供の有無，個人収入，世帯収入との重回帰係数，相関係数

発達障害

社会的マイノリティへの関心との相関係数は「性別」，「子どもの有無」，「専門性」，当事者が自身であるか（「自身」），当事者が家族にいるか（「家族」），知人にいるかという質問項目（「知人」と1%水準で有意に関連していることが示される。重回帰分析では「性別」，「家族」「専門性」は0.1%水

準で、「知人」、「子どもの有無」は1%水準で、「専門性」は5%水準で社会的マイノリティへの関心を有意に説明する。

#### (ア) 身体障害

社会的マイノリティへの関心との相関係数は「性別」と5%水準で「専門性」、「自身」という質問項目と1%水準で有意に関連していることが示される。重回帰分析では「専門性」、「自身」は0.1%水準で、「性別」、「子どもの有無」は1%水準で、「年齢」は5%水準で社会的マイノリティへの関心を有意に説明する。

#### (イ) 性的マイノリティ

社会的マイノリティへの相関係数は性別と5%水準で「専門性」、「自身」、「知人」という質問項目と1%水準で有意に関連していることが示される。重回帰分析では「専門性」、「自身」は0.1%水準で、「性別」、「知人」は1%水準で社会的マイノリティへの関心を有意に説明する。

#### (ウ) 貧困

社会的マイノリティへの相関係数は性別、世帯収入、個人収入と5%水準で「専門性」、「自身」、「家族」、「知人」という質問項目と1%水準で有意に関連していることが示される。重回帰分析では「専門性」は0.1%水準で、「年齢」、「自身」、「知人」は5%で社会的マイノリティへの関心を有意に説明する。

### 考察

各社会的マイノリティに関して「性別」、「自身」「知人」、「専門性」との間に強い関連が見られる。一方「家族」との関連が見られるのは発達障害のみであり、「年齢」との関連は貧困のみで見られた。このことから4つの社会的マイノリティに対して、男性よりも女性の方が、またその社会的マイノリティが自身または近い知人と関係しており、専門的知識を有する者の方が関心が高いことが示された。

一方、一般的に「知人」よりも接触頻度が高いと考えられる「家族」と発達障害を除く他の社会的マイノリティとの関連が弱いという結果が出たことから、社会的マイノリティに対する関心は単なる接触の頻度だけではなく

その質にあるとする接触仮説を裏付ける結果となった。今回の結果は接触の質において「家族」よりも「知人」との接触が社会的マイノリティに対する関心を高めることとつながっていることが示唆されている。発達障害において「家族」との関連が強いのは発達障害が主に教育現場で見聞きする言葉であることが作用していると考えられる。

加えて各分野における社会的マイノリティに対する専門的知識も関心の高さに影響することが示された。

先行研究からもわかるように日常生活において社会的マイノリティに属する人と交流する機会は人々が気付いていないだけで潜在的に多いと考えられる。

以上の結果から、社会的マイノリティは身近な他者に社会的マイノリティがいると意識すること、専門的知識を共有する場を設けること、交流の機会を増やすことが人々の社会的マイノリティへの関心を強めるということが示唆される。

また「家族」が社会的マイノリティへの関心との関連が薄いことから社会的マイノリティに付随する様々な課題が家族内で共有できていない場合があること、そのため周囲の人間や社会からのサポートが不可欠であることが考えられる。特に性的マイノリティにおいては、先行研究（NHK, 2015）ではカミングアウトの対象として選ぶのが家族よりも友人であるという報告があり、当事者も家族へのカミングアウトに困難を抱えているとされているが、今回の結果は家族の関心の低さをも示す結果となり、家庭内での共有のされにくさが改めて示される結果となった。

## ② 社会的マイノリティと道徳的基盤との関連

社会的マイノリティへの関心を従属変数、道徳基盤を独立変数として重回帰分析を行った。

	発達障害		身体障害		性的マイノリティ		貧困	
危害・ケア	0.29	**	0.31	**	0.23	*	0.40	***
公平・欺瞞	0.03		0.04		0.17		0.25	*
忠誠・背信	0.19		0.18		0.07		-	
							0.14	
権威・転覆	-0.20		-0.32	**	-0.42	***	0.25	*
神聖・墮落	0.17		0.11		0.12		0.10	
<b>R<sup>2</sup></b>	0.05		0.04		0.05		0.08	

上記の結果より「危害・ケア」基盤が高いほど、すべての社会的マイノリティへの関心が高いことが示された。また「権威・転覆」基盤が高いほど身体障害・性的マイノリティへの関心は低くなるが貧困への関心は高くなることが示唆された。

## 考察

先述の通り、社会的秩序のため権威を重視する保守イデオロギーを重視するものは社会的マイノリティを排除する傾向があることが示されており、「権威・転覆」基盤を重視と貧困を除く社会的マイノリティとの関連が負となった今回の結果は先行研究を裏付ける結果となった。

一方、排他的態度と関連があると考えられていた「神聖・墮落」基盤との関連が見られなかった。集団内の規律を重視する志向が社会的マイノリティへの関心の低さと関連していることが示唆されている。

自集団から異なる存在を排除しようとする「神聖・墮落」基盤ではなく自集団の規律を維持しようとする「権威・転覆」基盤が社会的マイノリティへの関心の低さとの関連が強くなるという今回の結果は、現代の社会における偏見や差別の在り方を反映していると考えられる。先述の通り、人種や民族、宗教などを理由に、就職や結婚などにおいて差別的待遇を行う古典的レイシズムは現代社会においてみられる頻度は減っていったが、社会的マイノリティを、秩序を乱すものとして排斥する現代的レイシズムに類する言説が見ら

れる現状を示唆する結果となった。

現在の差別・偏見に関する教育では自分と異なる他者を理解する理解啓発に重点を置かれている。しかし、関東大震災における朝鮮人虐殺の例にあるように社会的な不安が高まると、偏見が助長され、差別が先鋭化されることが知られており、その背景には揺らいだ社会秩序を堅持しようとする動きの中で秩序を復活させようとする動きがあることが言われている。今回の「権威・転覆」基盤が社会的マイノリティへの関心と負の関係を示す今回の結果から、社会的秩序を重視するあまり、その社会的秩序にそぐわない人を排斥する態度が生まれていないかを問い、社会的秩序に対して批判的な考えを育てる教育の必要性が示唆されると考えられる。

### ③ 各社会的マイノリティ間の比較

各社会的マイノリティ間の特徴を比較するため、性差、年代ごとの比較を行った

	自由度	平方和	平均平方	F	P	
性差	90.56	1	90.56	21.84	0.00	***
世代	29.84	4	7.46	1.80	0.13	
性別×世代	16.89	4	4.22	1.02	0.40	
被験者間残差	2114.61	510	4.15			
社会的マイノリティ	109.40	3.00	36.47	45.54	0.00	***
性差×社会的マイノリティ	2.26	3	0.75	0.94	0.42	
世代×社会的マイノリティ	47.81	12	3.98	4.97	0.00	***
性別×世代×社会的マイノリティ	23.84	12	1.99	2.48	0.00	**
被験者内残差	1225.20	1530	0.80			
残差	3660.39	2079	1.76			

表 1

表 1 より被験者間要因としては性差が、被験者内要因としては社会的マイノリティがそれぞれ有意であり、世代×社会的マイノリティ、性別×世代×社会的マイノリティの交互作用が有意であることが合示唆された。

### 1. 社会的マイノリティ

それぞれの社会的マイノリティにおける得点の平均値, 標準偏差を表 2 に, 4 つの社会的マイノリティを二組ずつペアにして比較した結果を表 3 に示す。それぞれのペアにおいて関心がそれぞれ 5%水準で有意に異なり, 貧困, 発達障害, 身体障害, 性的マイノリティの順に関心が強いことが示唆される。

	N	MEAN	SD
発達障害	520	3.05	1.38
身体障害	520	2.91	1.26
性的マイノリティ	520	2.60	1.29
貧困	520	3.23	1.30

表 2

	差分	T 値	自由 度	P 値	調整済 み P 値		
性的マイノリティ — 貧困	-0.63	10.61	510	0.00	0.00	性的マイノリ ティ < 貧困	*
発達障害 — 性的マイノリティ	0.45	8.13	510	0.00	0.00	発達障害 > 性的マイノリ ティ	*
身体障害 — 性的マイノリティ	0.31	5.94	510	0.00	0.00	身体障害 > 性的マイノリ ティ	*
身体障害— 貧困	-0.32	5.60	510	0.00	0.00	身体障害 < 貧 困	*
発達障害— 貧困	-0.18	2.97	510	0.00	0.01	発達障害 < 貧 困	*
発達障害— 身体障害	0.14	2.84	510	0.00	0.01	発達障害 > 身 体障害	*

表 3

表 3 より, 関心の高さは貧困 > 発達障害 > 身体障害 > 性的マイノリティの順で並べられる。

[交互作用]

SOURCE	SS	DF	MS	F-RATIO	P-VALUE	
年代 @ 発達障害	20.12	4	5.03	2.76	0.03	*
残差 @ 発達障害	929.46	510	1.82			
年代 @ 身体障害	25.51	4	6.38	4.20	0.00	**
残差 @ 身体障害	774.62	510	1.52			
年代 @ 性的マイノリティ	21.32	4	5.33	3.39	0.01	**
残差 @ 性的マイノリティ	801.79	510	1.57			
年代 @ 貧困	10.70	4	2.68	1.64	0.16	Ns
残差 @ 貧困	833.94	510	1.64			
社会的マイノリティ @ 20代	40.35	3	13.45	16.66	0.00	***
残差 @ 20代	247.02	306	0.81			
社会的マイノリティ @ 30代	48.89	3	16.30	25.07	0.00	***
残差 @ 30代	198.91	306	0.65			
社会的マイノリティ @ 40代	47.85	3	15.95	20.07	0.00	***
残差 @ 40代	243.24	306	0.79			
社会的マイノリティ @ 50代	17.93	3	5.98	7.22	0.00	***
残差 @ 50代	253.29	306	0.83			
社会的マイノリティ @ 60代以上	2.17	3	0.72	0.78	0.50	Ns
残差 @ 60代以上	282.74	306	0.92			

表 4

表 4 より年代差が発達障害において 5%水準、身体障害、性的マイノリティにおいて 1%水準で有意差が見られた。また社会的マイノリティに対する関心は 20 代、30 代、40 代、50 代において 0.1%水準でそれぞれ有意差が見られた。

## 2. 各社会的マイノリティへの関心の年代差

[身体障害]

PAIR	DIFF	T-VALUE	DF	p	ADJ. P		
20代-30代	-0.69	4.0508	510	0.00	0.00	20代 < 30代	*
30代-60代以上	0.40	2.363	510	0.02	0.11	30代 = 60代以上	
20代-40代	-0.38	2.2505	510	0.02	0.15	20代 = 40代	
30代-50代	0.38	2.2505	510	0.02	0.15	30代 = 50代	
20代-50代	-0.31	1.8004	510	0.07	0.43	20代 = 50代	
30代-40代	0.31	1.8004	510	0.07	0.43	30代 = 40代	
20代-60代以上	-0.29	1.6878	510	0.09	0.43	20代 = 60代以上	
40代-60代以上	0.10	0.5626	510	0.57	1.00	40代 = 60代以上	
40代-50代	0.08	0.4501	510	0.65	1.00	40代 = 50代	
50代-60代以上	0.02	0.1125	510	0.91	1.00	50代 = 60代以上	

表 5：身体障害への関心の年代差

20代と30代を比較すると5%水準で有意差が見られ、30代の方が20代よりも強い関心を持っていると自覚していることが示唆された。

PAIR	DIFF	T-VALUE	DF	P	ADJ.P		
20代-60代以上	-0.54	3.10	510	0.00	0.02	20代 < 60代以上	*
20代-50代	-0.46	2.65	510	0.01	0.05	20代 < 50代	*
30代-60代以上	-0.39	2.27	510	0.02	0.14	30代 = 60代以上	
40代-60代以上	-0.36	2.05	510	0.04	0.25	40代 = 60代以上	
30代-50代	-0.32	1.82	510	0.07	0.41	30代 = 50代	
40代-50代	-0.28	1.60	510	0.11	0.44	40代 = 50代	
20代-40代	-0.18	1.05	510	0.29	1.00	20代 = 40代	
20代-30代	-0.14	0.83	510	0.41	1.00	20代 = 30代	
50代-60代以上	-0.08	0.44	510	0.66	1.00	50代 = 60代以上	
30代-40代	-0.04	0.22	510	0.83	1.00	30代 = 40代	

表 6：性的マイノリティへの関心の年代差

20代と60代以上、20代と50代を比較すると5%水準で有意差が見られ、60代以上の方が20代よりも、また50代の方が20代よりも強い関心を持っていると自覚していることが示唆された。

3. 各年代における社会的マイノリティへの関心

[20代]

PAIR	DIFF	T- VALU E	DF	P	ADJ.P		
性的マイノリ ティ-貧困	-0.84	6.44	102	0.00	0.00	性的マイノリテ ィ < 貧困	*
身体障害-貧困	-0.60	4.61	102	0.00	0.00	身体障害 < 貧 困	*
発達障害-性的 マイノリティ	0.51	3.83	102	0.00	0.00	発達障害 > 性 的マイノリティ	*
発達障害-身体 障害	0.27	2.80	102	0.01	0.02	発達障害 > 身 体障害	*
発達障害-貧困	-0.33	2.31	102	0.02	0.05	発達障害 < 貧 困	*
身体障害-性的 マイノリティ	0.24	2.15	102	0.03	0.05	身体障害 > 性 的マイノリティ	*

表7: 社会的マイノリティ@20代

貧困 > 発達障害 > 身体障害 > 性的マイノリティ

[30代]

PAIR	DIFF	T- VALU E	DF	P	ADJ. P		
身体障害-性的 マイノリティ	0.79	7.30	102	0.00	0.00	身体障害 > 性的 マイノリティ	*
発達障害-性的 マイノリティ	0.80	6.85	102	0.00	0.00	発達障害 > 性的 マイノリティ	*
性的マイノリテ ィ-貧困	-0.79	6.60	102	0.00	0.00	性的マイノリテ ィ < 貧困	*
発達障害-身体 障害	0.01	0.11	102	0.91	1.00	発達障害 = 身体 障害	
発達障害-貧困	0.01	0.08	102	0.94	1.00	発達障害 = 貧困	
身体障害-貧困	0.00	0.00	102	1.00	1.00	身体障害 = 貧困	

表 8：社会的マイノリティ@30代

貧困＝発達障害＝身体障害＞性的マイノリティ

[40代]

PAIR	DIFF	T-VALUE	DF	P	ADJ.P		
性的マイノリティ-貧困	-0.94	7.43	102	0.00	0.00	性的マイノリティ < 貧困	*
発達障害-貧困	-0.63	4.70	102	0.00	0.00	発達障害 < 貧困	*
身体障害-貧困	-0.50	4.10	102	0.00	0.00	身体障害 < 貧困	*
身体障害-性的マイノリティ	0.44	3.35	102	0.00	0.00	身体障害 > 性的マイノリティ	*
発達障害-性的マイノリティ	0.32	2.80	102	0.01	0.01	発達障害 > 性的マイノリティ	*
発達障害-身体障害	-0.13	1.11	102	0.27	0.27	発達障害 = 身体障害	

表 9：社会的マイノリティ@40代

貧困＞発達障害＝身体障害＞性的マイノリティ

[50代]

PAIR	DIFF	T-VALUE	DF	P	ADJ.P		
発達障害-性的マイノリティ	0.48	3.71	102	0.00	0.00	発達障害 > 性的マイノリティ	*
性的マイノリティ-貧困	-0.42	3.51	102	0.00	0.00	性的マイノリティ < 貧困	*
発達障害-身体障害	0.39	2.99	102	0.00	0.01	発達障害 > 身体障害	*
身体障害-貧困	-0.34	2.76	102	0.01	0.02	身体障害 < 貧困	*
身体障害-性的マイノリティ	0.09	0.83	102	0.41	0.82	身体障害 = 性的マイノリティ	
発達障害-貧困	0.06	0.40	102	0.69	0.82	発達障害 = 貧困	

表 10：社会的マイノリティ@50代

貧困＝発達障害＞身体障害＝性的マイノリティ

① 各社会的マイノリティの情報に触れる頻度の性差と年代差の交互作用の影響

「あなたはどの程度[社会的マイノリティ]に関する本や雑誌，テレビの特集をどの程度見ますか」

[交互作用]

SOURCE	SS	DF	MS	F-RATIO	P-VALUE	
性差	135.05	1	135.05	30.54	0.00	***
年代	27.50	4	6.87	1.55	0.19	ns
性差 X 年代	13.89	4	3.47	0.79	0.54	ns
SX 性差 X 年代	2255.37	510	4.42			
社会的マイノリティ	43.06	3	14.35	21.17	0.00	***
性差 X 社会的マイノリティ	1.75	3	0.58	0.86	0.46	ns
年代 X 社会的マイノリティ	15.21	12	1.27	1.87	0.03	*
性差 X 年代 X 社会的マイノリティ	11.74	12	0.98	1.44	0.14	ns
S X 性差 X 年代 X 社会的マイノリティ	1037.25	1530	0.68			
TOTAL	3540.80	2079	1.70			

表 8

表 8 より被験者間要因としては性差が，被験者内要因としては社会的マイノリティがそれぞれ有意であり，世代×社会的マイノリティの交互作用が有意であることが示唆された。

1. 社会的マイノリティ

それぞれの社会的マイノリティにおける得点の平均値，標準偏差を表 9 に，4つの社会的マイノリティを二組ずつペアにして比較した結果を表 10 に示す。身体障害-性的マイノリティ以外のそれぞれのペアにおいて関心がそれぞれ 5%水準で有意に異なり，貧困，発達障害，身体障害，性的マイノリティの順に関心が強いことが示唆される。

社会的マイノリティ	N	MEAN	S.D.
発達障害	520	2.73	1.36
身体障害	520	2.60	1.22
性的マイノリティ	520	2.55	1.29
貧困	520	2.92	1.31

表 9

PAIR	DIFF	T- VALU E	DF	P	ADJ. P		
性的マイノ リティ-貧困	-0.37	7.03	510	0.00	0.00	性的マイノリ ティ<貧困	*
身体障害-貧困	-0.33	6.42	510	0.00	0.00	身体障害<貧困	*
発達障害-貧困	-0.20	3.52	510	0.00	0.00	発達障害<貧困	*
発達障害-性的 マイノリティ	0.18	3.23	510	0.00	0.00	発達障害>性的 マイノリティ	*
発達障害-身体 障害	0.13	2.97	510	0.00	0.01	発達障害>身体 障害	*
身体障害-性的 マイノリティ	0.05	0.95	510	0.34	0.34	身体障害>性的 マイノリティ	

表 10

交互作用

SOURCE	SS	DF	MS	F-RATIO	P-VALUE	
年代 AT 発達障害	10.28	4	2.57	1.44	0.22	Ns
ER AT 発達障害	909.00	510	1.78			
年代 AT 身体障害	9.35	4	2.34	1.62	0.17	Ns
ER AT 身体障害	733.94	510	1.44			
年代 AT 性的マイノリティ	6.09	4	1.52	0.94	0.44	Ns
ER AT 性的マイノリティ	829.94	510	1.63			
年代 AT 貧困	16.98	4	4.25	2.64	0.03	*
ER AT 貧困	819.73	510	1.61			
社会的マイノリティ AT 20代	11.31	3	3.77	5.84	0.00	***
S X 社会的マイノリティ AT 20代	197.50	306	0.65			
社会的マイノリティ AT 30代	16.74	3	5.58	8.29	0.00	***
S X 社会的マイノリティ AT 30代	206.09	306	0.67			
社会的マイノリティ AT 40代	14.51	3	4.84	9.31	0.00	***
S X 社会的マイノリティ AT 40代	158.93	306	0.52			
社会的マイノリティ AT 50代	13.99	3	4.66	5.74	0.00	***
S X 社会的マイノリティ AT 50代	248.41	306	0.81			
社会的マイノリティ AT 60代以上	1.71	3	0.57	0.77	0.51	Ns
S X 社会的マイノリティ AT 60代以上	226.32	306	0.74			

表 11

表 11 より年代差が貧困において 5%水準で有意差が見られた。また社会的マイノリティに対する関心は 20 代, 30 代, 40 代, 50 代において 0.1%水準でそれぞれ有意差が見られた。

[各年代における社会的マイノリティへの関心]

[20代]

PAIR	DIFF	T- VALU E	DF	P	ADJ.P		
性的マイノリ ティ-貧困	-0.41	4.26	102	0.00	0.00	性的マイノリテ ィ < 貧困	*
身体障害-貧困	-0.38	3.56	102	0.00	0.00	身体障害 < 貧 困	*
発達障害-身体 障害	0.17	1.91	102	0.06	0.18	発達障害 = 身 体障害	
発達障害-貧困	-0.21	1.67	102	0.10	0.30	発達障害 = 貧 困	
発達障害-性的 マイノリティ	0.20	1.58	102	0.12	0.30	発達障害 = 性 的マイノリティ	
身体障害-性的 マイノリティ	0.03	0.26	102	0.80	0.80	身体障害 = 性 的マイノリティ	

表 12

[30代]

PAIR	DIFF	T- VALUE	DF	P	ADJ.P		
性的マイノリ ティ-貧困	-0.57	4.22	102	0.00	0.00	性的マイノリテ ィ < 貧困	*
発達障害-性的 マイノリティ	0.29	2.63	102	0.01	0.03	発達障害 > 性 的マイノリティ	*
身体障害-貧困	-0.29	2.49	102	0.01	0.04	身体障害 < 貧 困	*
身体障害-性的 マイノリティ	0.28	2.49	102	0.01	0.04	身体障害 > 性 的マイノリティ	*
発達障害-貧困	-0.28	2.39	102	0.02	0.04	発達障害 < 貧 困	*
発達障害-身体 障害	0.01	0.11	102	0.92	0.92	発達障害 = 身 体障害	

表 13

貧困 > 発達障害 = 身体障害 > 性的マイノリティ

[40 代]

PAIR	DIFF	T-VALUE	DF	P	ADJ.P		
性的マイノリティ-貧困	-0.49	4.77	102	0.00	0.00	性的マイノリティ < 貧困	*
発達障害-貧困	-0.40	3.69	102	0.00	0.00	発達障害 < 貧困	*
身体障害-貧困	-0.36	3.63	102	0.00	0.00	身体障害 < 貧困	*
身体障害-性的マイノリティ	0.13	1.39	102	0.17	0.51	身体障害 = 性的マイノリティ	
発達障害-性的マイノリティ	0.09	0.82	102	0.42	0.83	発達障害 = 性的マイノリティ	
発達障害-身体障害	-0.05	0.57	102	0.57	0.83	発達障害 = 身体障害	

表 14

[50 代]

PAIR	DIFF	T-VALUE	DF	P	ADJ.P		
身体障害-貧困	-0.42	3.70	102	0.00	0.00	身体障害 < 貧困	*
発達障害-身体障害	0.38	3.24	102	0.00	0.00	発達障害 > 身体障害	*
性的マイノリティ-貧困	-0.34	2.85	102	0.01	0.02	性的マイノリティ < 貧困	*
発達障害-性的マイノリティ	0.30	2.11	102	0.04	0.11	発達障害 = 性的マイノリティ	
身体障害-性的マイノリティ	-0.09	0.77	102	0.44	0.89	身体障害 = 性的マイノリティ	
発達障害-貧困	-0.04	0.27	102	0.79	0.89	発達障害 = 貧困	

表 15

## 考察

どの年代においても社会的マイノリティへの関心は、貧困、発達障害、身体障害、性的マイノリティの順番で高いことが示されている。その要因として貧困は今回の4つの社会的マイノリティの中で最も可変性があり回答者が自分に身近な問題として考える傾向にあること、また性的マイノリティは異性愛を前提とする社会において関心を表明することそのものが避けられることなどが考えられる。また社会的マイノリティへの関心に対する年代間の差としては、身体障害への関心において30代の方が20代よりも、貧困においては60代以上の方が20代よりも、また50代の方が20代よりも強い関心を持っていると自覚していることが示唆された。性的マイノリティに対するとらえ方は近年において変遷が著しく、また先行研究（田中・貞永・武谷, 2017）において若年層よりも中高年層のほうが性的マイノリティに関する知識が薄いことが示されており、関心の在り方に関する詳しい研究を行う必要がある。貧困に関する年代差は50代、60代における経済的な格差、貧困に関する実生活に与える影響の甚大さが背景にあると考えられる。

## 4. 総合考察

本研究は先行研究では分割して研究されている発達障害、性的マイノリティ、身体障害、貧困という4種類の社会的マイノリティを概観し、各社会的マイノリティへの態度に共通する特徴と社会的マイノリティごとに異なる点について検討を行った。道徳的基盤と社会的マイノリティとの関連では集団における秩序・忠誠を重視する傾向が社会的マイノリティへの関心のなさに関連していることから、近年重視されている理解啓発に加え、秩序に対する批判的な考え方の重視が偏見・差別の低減に寄与する可能性が示唆された。今後は批判的思考と偏見・差別との関連について実証的な研究が必要だと考えられる。

また社会的マイノリティへの関心に影響を与える要因としてすべての要因において女性が男性よりも関心を強く持っていることが示された。先行研究（釜野, 2017）を裏付ける結果となったがその理由の一つとして女性が現代社会においてマイノリティとしての扱いを受けていることで他の社会的マイノリティに対しても強い共感性を持っていると考察される。今後の研究では女性が自身のことを社会的マイノリティと考えている程度と他の社会的マイノリティへの関心の関連についての検討が今後期待される。

一方、接触の程度についても興味深い点が見られた。性的マイノリティと

身体障害では家族よりも友人・知人に当事者がいる人の方が関心を強く持つことが示され、社会的マイノリティは家族のみならず周辺の人々との関わりが重視されていること、社会的マイノリティに類する課題を家族内にとどめるのではなく社会の中で共有することの重要性が改めて示された。

社会的マイノリティ間の関心の程度の差も興味深い。どの年代であっても性的マイノリティへの関心が低く、現代の日本において社会的な課題として取り上げられる機会が少ないことが明らかになった。しかし性的マイノリティは個人の選択の問題ではなく性的マイノリティに伴う問題は我々の社会システムに伴うものである。社会の中でより活発に議論を行うことが必要であり、教育現場においてもその存在を明示し考える機会を整える必要がある。

今回の研究では社会的マイノリティへの関心の背景に個人の価値観や属する特性が深く関係していることが示唆された。今後の研究では各属性における社会的マイノリティの在り方に関する質的な研究が求められる。

#### 引用文献

Cox, W. T.L., Devine, P. G., Planet, E. A., & Schwartz, L.L. (2014). Toward a comprehensive understanding of officer's shooting decisions: No simple answers to this complex problem. *Basic and Applied Social Psychology*, **36**, 356-364.

Fisher, C. B., Wallace, S. A., & Fenton, R. E. (2000). Discrimination distress during adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **29**, 679-695.

Hunger, J. M., Major, B., Blodorn, A., & Miller, C. T. (2015). Weighed down by Stigma: How weight-based social identity threat contributes to weight gain and poor health. *Social and Personality Psychology Compass*, **9**, 255-268.

Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York: Pantheon. (高橋洋訳, 2014『社会はなぜ左と右にわかれるのか-対立を超えるための道徳心理学』 紀伊国屋書店)

Jost J. T, Glaser J, Kruglanski A. W, Sulloway F. 2003b. Political conservatism as motivated social cognition. *Psychol. Bull.* 129:339-75

Jost J. T, Glaser J, Kruglanski A. W, Sulloway F. 2003c. Exceptions that

- prove the rule: using a theory of motivated social cognition to account for ideological incongruities and political anomalies. *Psychol. Bull.* 29:383-93
- Jost, J. T., Federico, C. M., & Napier, J. L., (2009). Political ideology: Its structure, functions, and elective affinities. *Annual Review of Psychology*, 60, 307-337.
- McConahay, J. B. (1986). Modern racism, ambivalence, and the modern racism scale. IN J. F. Dovidio & S. L. Gartner (Eds.), *Prejudice, Discrimination, and Racism*. Orlando: Academic Press. Pp. 91-125.
- Tajfel, H., Billig, M., Bundy, R. O., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.
- NHK (2015) LGBT 当事者アンケート調査
- 稲葉昭子 (2010). 学校教育におけるセクシュアル・マイノリティ 創価大学大学院紀要, 32, 259-280.
- Weiner, B. (2006). *Social motivation, justice, and the moral emotion: An attributional approach*. Lawrence Erlbaum Associates. (B. ワイナー 速水俊彦・唐沢かおり(監訳)(2007). 社会的動機づけの心理学—他者を裁く心と道徳的感情— 北庵治書房).
- 生川善雄 梅谷忠勇 前川久男 (2006). 知的障害者に対する態度に関する文献研究:態度の多次元的研究に焦点をあてて 千葉大学教育学部研究紀要, 54, 15~23.
- 池田謙一 唐沢穰 工藤恵理子 村本由紀子 (2010). 社会心理学 有斐閣
- 加賀美常美代 横田雅弘 坪井健 工藤和宏 (2012). 多文化社会の偏見・差別:形成のメカニズムと低減のための教育 明石出版
- 釜野さおり (2017). 同性愛・両性愛についての意識と家族・ジェンダーについての意識の規定要因:性的マイノリティについての意識:2015年全国調査から 家族社会学研究, 29(2), 200-215
- 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也, (2016). 性的マイノリティについての意識—2015年全国調査報告書 科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ(研究代表者 広島修道大学 河口和也) 編
- 北村英哉 唐沢穰 偏見や差別はなぜ起こる?:心理メカニズムの解明と現

象の分析 ちとせプレス

曹 慶鎬 (2018). 道徳基盤理論による外国人に関する意識の研究 駒澤社会学研究, **50**, . 99-112

若槻健 (2015). 「排除」に対抗する学校 教育社会学研究, **96**, 131-152.

川島聡 飯野由里子 西倉実季 星加良司 (2016). 合理的配慮：対話を開く 有斐閣